



隠

岐が世界ジオパークに登録され、その魅力を語る機会がとて増えてきました。その切り口の一つに「固有種」があります。「固有種」といえばその場所にしか生息していない生物を指します。離島や高い山など何らかの要因で隔離された環境で独特の進化を遂げた生物です。世界中には多種多様な固有種が生息しており、ぱっと見たときの外観で違いがはっきりしている独特な形態をしたものもいれば、同じ仲間の生物とどこがどう違うのか外観からはほとんど区別がつかないものもいます。現在確認されている隠岐の「固有種」(動植物)は 38 種とされています。同じ離島の小笠原諸島は 818 種、屋久島は 221 種確認されており、比べてみると隠岐は少なめです。こんなに差があるのはなぜだと思いますか?固有種は限定された地域内で独自の進化をした生物であることは先に述べました。進化が進むためには隔離されてからの時間がとても重要です。隔離された時間が長ければ長いほどその環境に適応した形態へ変化していくのです。例えば島ごとに餌となる植物の実が異なれば、そこだけに棲む野鳥の嘴の形は餌に合わせて変化していきます。もちろん数千年以上の長い時間をかけて少しずつです。これが、有名なダーウィンの進化論ですね。環境に合わせて都合のよい形となっていくのです。先ほどの問いの答えもここにあります。隠岐は、小笠原や屋久島に比べて、離島になってからの時間が短いです。島になって約 1 万年といわれており、屋久島は約 1400 万年、小笠原にいたっては約 4800 万年

もたっています。隔離されてからの時間に膨大な差があるのです。そして、隠岐の約 1 万年という時間は形態が大きく異なるまで変化するには短すぎるということが分かります。

今回は隠岐の固有種の中で「オキオサムシ」(*Carabus daisen okianus*)を紹介します。オサムシの仲間は漫画家の手塚治虫氏が愛した昆虫としても有名です。彼の名前はオサムシからもらったようです。飛べない昆虫で、森林内のやや湿った薄暗いところで落ち葉が積もる地上を徘徊しながらミミズや小昆虫などを餌として生活しています。基本種は本土に生息する「ダイセンオサムシ」(*Carabus daisen*)で体色が黒色です。これが変化した亜種である「オキオサムシ」の体色は赤銅色です。なぜ隠岐で進化するとこの色になるのかははっきり解っていません。ちなみに体色以外の違いは「オキオサムシ」の方がやや小型化しているもののはっきりした差が分かりません。飛べないということは好む生息環境を自由自在に移動できないわけですから、この昆虫が生息できる環境を保たなければ絶滅してしまいます。現在、森林が多い金光寺山一体に生息していますが、むやみに樹木伐採をすれば地表がちまち乾燥し、また、草地化が進んでしまうことで生存が脅かされる希少種です。また、隠岐で採取された個体がネットオークションでもよく販売されていることから、業者による節度のない大量採取の可能性もあります。町民みんなで認識を高め、全力で守らなければ絶滅の恐れがある、海士の宝です。

(海士町文化財保護審議委員 深谷 治)